

A woman with short dark hair is laughing joyfully in a clothing store. She is wearing a colorful patterned shirt and a necklace. She is surrounded by racks of various clothing items, including a purple and white plaid shirt in the foreground. The store has bright overhead lighting.

宇津木えり

JOSHIBI no.172

よろこんでくれる人がいる。
だから自分も幸せになれる。

まわりをパッと明るくする、ポジティブなパワーに満ちたファッションデザイナー、宇津木えりさん。自身のブランド、mercibeaucoupは、そんな人となりをもっと映し出している。ものの作りを通じて幸せを世にめぐらせる、宇津木さんの生き方とは。

Photo 須藤秀之 Text 立古和智

女

子美生だった頃は、ホント楽しかったですね。学校も楽しい授業ばかりで、勉強をしている意識は全然ありませんでした。自分の手で何かを形にすることは幼いときから大好きでしたし、身体で表現するバレエ、バンド、ジャズダンスなどにもめり込みました。現在の仕事にもあてはまることですが、私は自分が満足するだけの表現ではなく、人との関わりの中で表現するのが好き。ダンスなら舞台があり、衣装があり、メイクがあつて、人に観てもらい、拍手をもらう。ファッションというなら、それはビジネスとして成立しているということ。もちろんビジネス一辺倒で、自分をまったく生かせないといまらないけど、こうした自分のスタンスは、いくつかのブランドを渡り歩くうちに明確になりました。

私ね、出産して2カ月しか休みをとらず復職したんです。わけあつてすぐに働かざるを得なかつたのですが社会と接し続けていたいという気持ちも強くありました。じゃないと、取り残されそうだと感じたというか。私の場合、家にこもって人に会わずにいると、どんどん気持ちが悪くなっていく。





逆に人と会うだけで、気持ちはパーツと晴れるの(笑)。人から学んだり、刺激を受けるのはもちろんですが、人と接している、相手にも気持ち良くいてもらいたいから、わがままにならずにすむみたい(笑)。たしかに、子どもが幼いうちは、しばらくは一緒にいたいという気持ちもありました。けれど、働きだしたら「子育てだけに専念するのは、私には無理!」って。

私、ファッションを志したときからずっと「いつか自分のブランドを」と夢見ていたんです。けれども、子育てと仕事の両立に追われて、そんな夢も少し忘れかけたときに限って、自分のブランドを立ち上げるチャンスは巡ってくる(笑)。あの時点では「ものを売るのはすごく大変」と知っていましたが、息子を養わなければならなかったからホント参りましたよ。だって、子どもはまだ三歳でしたから。けどね「こんなチャンスはめったにやっこない」「一度きりの人生だ」と腹をくくったんです。「失敗したらどうしよう」なんて想像する暇もないほど必死です。すると底力って沸くんですよ。瀬戸際に立たされてがむしゃらになると、結果はきちんとしてくるんです。

ブランドを生み出すときって、当然、人に「新しい」と思わせる必要がある。だから、トレンドから何かを拾うのではなく、頼りにできるのは直感だけなんです。そして信じていけば、その直感はずり降りてくる。ただ待つのではなく、世の中の状況や、時代の傾向は知らなければならぬけど、すべてを網羅はできないし、ヒントになる対象はファッションではなくて、むしろ日常にある気がします。そして気になるものがあつたら、それに素直に従う。その先には、きつと何かがあるんです。

もちろん直感にしたがつても、誰も受け入れてくれないようなデザインではダメ。ですが、私の場合は最低5人が気に入ってくれると思えたらOKかな。前例のない提案だって、私は平気です。むしろ型にはまるのは苦手。すでに、たくさん失敗してきたから失敗は怖くないし、周囲が失敗と思っても、自分では失敗と思っていないのかもしれない。どんな仕事も、自分が全力で手がけて、楽しんで作ってくれたパタンナーがいて、喜んでくれたお客さんがいたなら、完全な失敗ではないでしょう? 少なくとも次につなげる「プラスの種」にはなります。



宇津木えり

1966年東京生まれ。1986年女子美術短期大学衣服デザイン科卒業。同年エスモード・ジャボン東京校に入学。修了後、パリの 스튜디오オベルソーで1年間学ぶ。帰国後、いくつかの企業でデザイナーとしての経験を積み、2001年に自身のブランドを発表。2005年株式会社エイ・ネットに入社。翌年、自身のブランド「メルシーポークー」を東京コレクションで発表。その後も同コレクションのほか、さまざまな場所で、半年に一度の発表を続け、人気ブランドとしての地位を確立。

この仕事を続けられるエネルギーの源は、自分にとって宝である「ものを創ること」によって、喜んでくれる人がいること。要は、お笑い芸人みたいなものなんです、ファンなしでは生きられない(笑)。洋服はある意味、道具に過ぎません。一番は喜んでもらうこと。喜んでもらえると、自分も幸せになれる。そういった気持ちが循環することを知っていて、私は、ずっとその気持ち良さに夢中なんですよ。

横浜、馬車道から女子美スタイル発信！

2月10日～13日の4日間にわたり、横浜のBankART STUDIO NYKにて「女子美スタイル2011―再生の光をつむいで」が開催されました。この展覧会は、1000点以上ある大学院・芸術学部・短期大学の全卒業・修了制作作品の中から選ばれた190点余の作品による学外展です。熱気あふれた会場の様子をお知らせいたします。



命

の再生の光が届きますように……との願いをこめて、展覧会デー

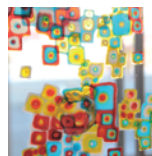
レクターの南郷宏教授と、キュレーターの日沼禎子准教授によって選抜された女子美生による数々の作品は、会場中を埋め尽くし、まさに圧巻。期間内来場者数も3000人近くにのぼり、昨年以上に活気あふれる展覧会となりました。

オープニングパーティーは、アーティストの久保田弘成氏による旧東独車「トラバント」を「港町ブルース(森進一)」のメロディーにのせ重機を用いて回転させるパフォーマンスで勢いよくスタート。続く「JOSHIBI Rainbow Award」授賞式では、審査員にちなんだ7色の審査員賞が7名に与えられました。審査員の方々は、今年も豪華な面々。コメントと共に賞が贈られました。また、賞の授与と共に受賞した学生のみなさんには、ファッショントキスタイル表現領域の学生チームによるカラーアワードにちなんだヘッド



JOSHIBI Rainbow Award

詳しくはwebにてご覧ください。http://www.joshibi.net/gw



Red Prize
グ・ツェンキン(リースペース・
オブ・アート・アンド・カルチャー)選

『la pluie』
松本来夢
短期大学部造形学科
デザインコース創造デザイン



Orange Prize
李 美那(神奈川県立近代美術
館葉山主任学芸員)選

『めぐる 本に囲まれる本棚』
中川めぐみ
芸術学部 デザイン学科
プロダクトデザインコース



Yellow Prize
三浦末雄(ミズマアートギャラ
リー、ディレクター)選

『2839801』
清野安由美
芸術学部 芸術学科



7名の審査員とアワード受賞者。ヘッドドレスと手にしているのはタイポグラフィ研究会有志制作の賞状とタトウ



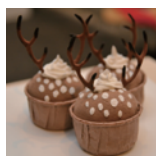
Green Prize
佐藤 卓(アートディレクター)選

『夢子屋』
三原由貴
芸術学部 デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース



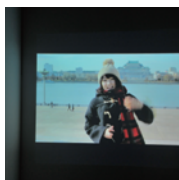
Blue Prize
ニル・ターク(在日イスラエル
大使館アートディレクター)選

『256日』
福島麻美
芸術学部 メディアアート学科



Indigo Prize
奥村敦正(アートディレクター、
女子美術大学教授)選

『little』
岩瀬彩香
芸術学部 絵画学科
洋画専攻 版画コース



Violet Prize
南 薫(美術評論家/女子美術
大学教授)選

『カタッポ』
河本 永
芸術学部 デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース

ドレスが贈られ、華を添えました。受賞の際、コメントを述べようとしているいろいろな思いが込み上げ、思わず涙ぐむ学生も続出。女子美生の制作への熱い思いが伝わってくる瞬間でした。
東日本大震災が起きてから初めての女子美スタイル。あるはずの日常を奪われてしまう災害への不安や危機感を感じながらも作りたいという緊張感を持って取り組んできた姿勢が伝わってくる作品が多く見られました。展覧会サブタイトルのように、卒業生のみなさんにはアートやデザインの力で希望の光をつむぎ、未来へ羽ばたいてほしいと願っています。

美しいものを作るために、まず自分が強くなるということ

2011年11月末、本学杉並キャンパスにてファッションデザイナーの山本耀司先生による実演講義後、前学長佐野ぬい先生との対談が開催されました。この講義は10数年以上も続いており、他では受けられない講義と大人気のもので、今回は講義の興奮がさめやらぬまま、トップアーティスト同士の対談がスタートする特別なプログラムでした。

「ラ

イバルは北斎。目標は高くな
くちゃんね」。対談の冒頭から、

すぐこれを使いたい、これを使った服を
作りたいと思っただですよ」と返します。

こんな言葉が山本先生の口から飛び出

そもそもおふたりのつながりは、佐野

しました。『富嶽三十六景』のあとがき

先生が山本先生に自身の作品集を贈ら

で「70歳までに描いたものにはろくな

れ、そのことがきっかけで佐野先生の

ものがない。73歳になってやっと描き

作品をモチーフにしたシャツやニット

たいものの本当の形がわかってきた。

を山本先生が作られた...という、いわ

よく描けるようになるのはこれから

ばコラボレーションワークメイト。

だ」と記した北斎にならない、今だからこ

アーティスト同士、対談の内容は制作時

そ、絵筆を握り画作に取り組んでいる

の意識の話まで広がっていきました。

山本先生。ファッション・ショー開催の

アーティストとして作り続けるために

合間に油絵を描くことが「新鮮で、楽し

は、「きれいに仕上げよう」という思いは

くてしょうがない。そうです。一方、Yoji

いらない、必要なのは「美しい、と思っ

や、Yoji Yamamotoの服が大好きと

もらえるものを作る」姿勢だと、佐野先

話す佐野先生。「山本先生の服を見てい

生は話します。「きれいなもの、かわい

ると、しっかりとしたデッサンを見て

ものは楽しいには充分だけれど、見た

いる気持ちになって、絵を描きたい気持

人が『美しい』と心をゆさぶられない。

ちがかき立てられてしまうの」と話せ

かわい、は弱い。美しいものをつ

ば、山本先生が「佐野先生の画集を拝見

るには、自分自身がまず強くなる

した瞬間、こんなきれいな色の組み合

てはいけない」。その言葉に大きく頷き

わせ、絶対、俺には描けない、と思っ

ながら山本先生も「強くなるために





佐野ぬい

青森県弘前市出身。本学洋画科卒業。新制作展作家賞を多数受賞の他、紺綬褒章を1986年と2011年に受章。本学卒業後は作家活動とともに、後進の指導に取り組み、2007年～2011年まで本学学長を務めた。青色を基調とする作品を多く発表し「ぬいブルー」「青の画家」と称される作家。新制作協会会員。本学名誉教授。

山本耀司

東京都生まれ。1966年慶應義塾大学法学部を卒業後、文化服装学院へ。1977年、Y'sにて東京コレクションデビュー。本学ファッションテキスタイル表現領域客員教授。企業の新制服のデザイン他、『BROTHER』『Dolls』等、北野武監督映画作品の衣装を数多く手がける。1994年、フランス政府より芸術文化勲章シュバリエを叙勲。2005年、フランス共和国 国家功労勲章オフィシエ受章。2011年、春季外国人叙勲にてフランス政府より芸術文化勲章コマンドゥールを叙勲。

今、美しいと言われているものに対しても、常に疑いをもっていくこと。疑問を持ち続けることが真の強さをもたらすのだと思う」と言葉が続けました。ぬいブルーをモチーフにしたYohji Yamamotoのメンズラインのシャツとジャケットを着こなし、出席した学生から「ぬい先生、かっこかわいい！」と声がかかり、会場内が笑いに包まれるシーンもありましたが、最前線で活躍されるおふたりだからこそ、伝わることがある貴重な対談となりました。



TOKYO ● 2020

APPLICANT CITY

日本で再び、
平和の祭典を…
思いをこめたロゴ

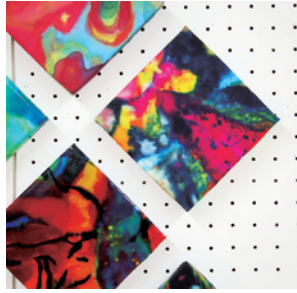
2011年11月末、2020年オリンピック・パラリンピックの東京招致活動のシンボルとなるロゴに、芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース4年島峰藍さんのデザインが採用されました。

日本を象徴する花、桜をモチーフに大きな「リース」が描かれ、リースを形づくる桜の花は赤、青、黄、緑のオリンピックカラーとともに、東京を表す色「江戸むらさき」の5色で彩られています。そして、永遠や幸福という意味に加え「再び戻る」という意味もあるというリース。この形には、1964年に開催された東京オリンピックの活気をもう一度この地に取り戻したい、そんな願いがこめられています。

「今、日本は震災の影響も大きく大変な時期です。あこがれのオリンピック選手みなさんの活気で、また元気な日本が戻ってきてくれたらいいな、という思いをこめました」と話す島峰さん。

もともと「リース」をモチーフに選んだのは、映画『ハリー・ポッター』シリーズの中でリースが手向けられるシーンに疑問に思ったのがきっかけ。リースには「再び戻る」意味があることを知り、迷わず今回のロゴのモチーフに決めたのだそうです。招致ロゴの発表会には、真珠をあしらった「リース」形のブローチをつけて臨みました。このブローチは、数年前に視聴覚障害者をサポートするためのロゴを作成した時、記念品としても作ったものとのこと。「リースとリースがつながったな、と気づいてうれしくなりました」と笑顔を見せてくれました。島峰さんデザインのロゴは、旗や封筒など様々な形で使用されます。





相模原キャンパスは3月11日～14日、杉並キャンパスでは3月11日～13日に平成23年度卒業制作展／修了制作展が開催されました。また相模原キャンパスでは11日に芸術学科優秀卒業研究および大学院修士論文発表会も行われました。学生生活の集大成となる卒業制作作品を鑑賞しに、多くの来場者でにぎわいました。

平成23年度
卒業制作／修了作品展

MESSAGE 01
.....

学校法人女子美術大学
理事長 大村 智



本学園は、幕末の開明的思想家・横井小楠の流れを汲む横井玉子とその志を受け継いだ佐藤志津を中心に創立されました。女性の社会進出などおぼつかない時代にあって、美術を通して女性の自立を図り専門家として積極的に社会に参画する人材を養成するという二人が掲げた理念は、今日でも時代

の先端をいくものです。一昨年、創立110周年を記念して作家・山崎光夫氏にお願いし、この二人を主人公とする『二つの星』という小説を執筆頂きました。折をみてご一読をお薦めします。皆様も諸先輩方の跡を継ぎ、実り多い大学生活を送られることを願っています。



新入生のみなさん、女子美へようこそ。

学長 横山 勝樹

みなさんには「自分らしい将来像」を描くことを、大事にしていきたいと思います。自分と向き合い、自分の見方やあり方を思索する。その絶好の機会が、学生時代なのです。それは世界的に先行きが不透明な21世紀を、迷うことなく生き抜いていく土台にもなる

でしょう。周囲の仲間との密なつながりや、一対一での生身のコミュニケーションも大切に。そうした機会を持つことは、自分をよく理解する上でも重要です。私自身もみなさんと顔を合わせ、言葉を交わしあえることを、今から楽しみにしています。



短期大学部部长
小林 信恵



芸術学部部长
橋本 弘安



大学院美術研究科長
上葛 明宏

太田 泰人

芸術学部
教授(特任)

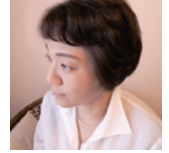


自分たちはどんなポジションにいるのか、なにをすればクリエイティブであるのか。世界が大きく変化している今日、自分たち自身の海図とコンパスを作ることが求められていると思います。過去の美術を読み解き、先人のさまざまな省察を探る美術史はそうした批評的行為の助けとなる学問のひとつです。またミュージオロジー(博物館学)は、現場の視点に立ちながら現代社会の中の美術文化制度やアートを取り巻く状況を研究します。

東京都出身。東京大学大学院、パリ・ソルボンヌ大学美術考古学研究所で近現代美術史を学ぶ。留学中、ボンビドー・センターの活動に衝撃を受けてキュレーターを志望。1983年以来、神奈川県立近代美術館で学芸員として多くの展覧会を企画してきた。

松本 博子

芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻 教授(特任)



自分なりの視点に、多くの情報が加われば新しい発想が生まれ、オリジナリティのあるアウトプットにつながります。そのためには興味がある対象だけではなく、世の中にあるいろいろな事象に意識を向けるクセをつけることが大切です。このクセこそが社会に出てから役立ちます。女子美生らしい、魅力的でパワフルな人を目指して一緒にがんばっていきましょう。

1983年本学芸術学部産業デザイン科卒業後、(株)東芝デザインセンター配属。新しいものづくりの提案として、セラミックや南部鉄等を素材とした地場産業とのコラボレーション「卓上H調理器シリーズ」を商品化。国内外のデザイン賞を受賞。良品計画やサンリオとのコラボレーションによる家電シリーズも手掛ける。



荒 姿寿

芸術学部 デザイン・工芸学科
工芸専攻 助教(特任)

外側の世界と強烈に出会っていく感覚鋭敏な時期に立つ皆さんと、創作の場を共有できることを嬉しく思います。私はいつも自然な心で日常を積極的に捉えること、そして手を動かして思考することを大切にしています。工芸の手仕事の多くは、素材に直に触れ、技法に習い、制作過程に集中して取り組む中で、新しい世界に出会うものです。まずは肩の力を抜いて創作の現場に立ってほしいと思います。

福島県生まれ。2002年本学芸術学部工芸科卒業後、金沢卯辰山工芸工房技術研修員を経て09年より本学非常勤講師に。12年本学大学院美術研究科美術専攻工芸研究領域(染)修了。2011年個展Espace Culturel Bertin Poirée(フランス)。第47回神奈川県美術展工芸部門大賞受賞。



鈴木 理恵子

芸術学部 アート・デザイン表現学科
ヒーリング表現領域 准教授(特任)

私たちは芸術だけではなく、日常生活においても、可視的なものを通じてみえる不可視的なもの、音の途絶えたところに存する音楽や言葉があることを知っています。五感を超え出たところに存する魂の感覚とでもいえるようなものを大切にし、その深みにおいて共有し合い、つながってゆくことができたらどんなにすてきなことでしょうか。私たちは日常性のなかに「魂の感覚」にいたる通路を探る旅人でもあるのです。

本学卒業、東京藝術大学大学院修了。公共建築物のデザイナーを経て05年~07年渡英。バーミンガム・シティ大学大学院Art,Health and Well-beingコースで、Doing Artによって人間と社会関わりを追究する新しい概念<Social Inclusion>に触れる。帰国後もその理論と実践に携わっている。

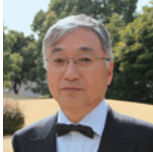


長崎 訓子

芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻 准教授(特任)

2010年度から非常勤講師としてお会いしていましたが、ご縁がありもっとたくさんお会いすることになりました。学生時代とは、思い通りの作品が作れなかったり将来のことが心配になったり、モヤモヤすることばかりの時代です。でも、今のうちにしか出来ないことがあるのだけは本当(実体験済み!)なので、めげずに色々なことに挑戦して欲しいと思っています。

1970年東京生まれ。イラストレーター。多摩美術大学染織デザイン科卒業。書籍の仕事が中心だが、絵本やグッズ、映画コラムの連載も手掛ける。代表作に菅田哲也著「武士道シックスティーン」(文藝春秋)など。



長谷川 好男

芸術学部 デザイン・工芸学科
 ヴィジュアルデザイン専攻 教授

学外のコンペに積極的に参加して、日本一をめざしてください。
 日本一になれなくても、自分の現在の位置がわかります。
 1番の人と自分の差は、意外と近いものです。
 位置がわかったら、もう一度挑戦してください。
 日本一のチャンスは、毎年おとずれます。
 日本一になったら、違う景色が見えてきます。



篠崎 京子

芸術学部 美術学科
 立体アート専攻 助教

おはようございまーす。こんにちはー。学生達の気持ちの良い声が弾みます。人前に出るのが苦手な私が縁あって30年間勤めてまいりましたが、この度、退職することになりました。在学生の皆さんには、この場をお借りしての挨拶となりました。また、女子美祭や卒業制作展で作品を拝見するのを楽しみにしています。その時には気軽に声をかけてください。お世話になりました。ありがとうございました。



小山 欽也

芸術学部 美術学科
 立体アート専攻 教授

日本の紙文化である和紙のルーツを辿ると、赤道上に拡がる原始的な手法で活用された樹皮繊維のタバやアマテに繋がる。紙が発明される以前の自然環境素材で書写材や祭儀物として幅広い用途があり、和紙のような魅力的な素材で生活具であるとともに芸術作品でもある。「温故知新」のように過去の事実を研究して、そこから新しい知識や道理を見つけ出すことが大切である。実用の文化をアートの接点を見据えて新しい紙のアートな創造の美を求めて行きたい。

なかや みわ

芸術学部 アート・デザイン表現学科
 ヒーリング表現領域 准教授(特任)



女子美卒業生としてこれから社会に羽ばたく皆さん、そして新たに希望と夢を持って女子美生として新しいスタートを切る皆さんに、教員というよりむしろ卒業生として、言葉を贈りたいと思います。同じ環境で学んでいても、個人の能力差や個性で学びとる内容は異なります。けれど能力も個性も伸ばすことができるのは自分自身だけ。女子美で時間を無駄遣いすることなく学び、そして学んだことが社会で生かせるように、悔いなく過ごしてください。

大澤 美樹子

芸術学部 デザイン・工芸学科
 工芸専攻 教授



人や物事をしっかり見つめることは自分を知ることであり、作品を作ることは自分の心を広げることであり、制作を続けることは自分に新しい驚きを、絶えず与えることに繋がるのです。感じたことを色や形に表すことが出来る私達は、いかに恵まれた者であることか…。女子美で学んだことが一生の仕事となり、学生と共に作品について語り合えたことは、本当に幸せな日々でした。



02 | 幅広い種類の材料を使った表現が、高評価

芸術学部絵画学科日本画専攻3年、山村遥さんの『自画像』が第38回東京春季創画展に入選しました。入選作について、山村さんは「黒兎の姿を借りて私の中の私を描いた作品です。いろんな素材を用いたことで作品の核である“兎”にとって重要なテクスチャーを表現できました」と話してくれました。2月にはグループ展にも出品し、活発に制作活動を続ける山村さん。今後の活躍に期待しています。



01 | 展覧会ブック&エディトリアルでADC賞受賞

芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻、立花文穂准教授がアートディレクションを手掛けた展覧会カタログが2011年度東京ADC賞(主催:東京アートディレクターズクラブ)を受賞しました。受賞対象となったカタログは、2011年3月8日～6月5日、国立国際美術館にて開催された「風穴 もうひとつのコンセプトアライズム、アジアから」のものでした。



03 | 実制作とプレゼンで優秀賞を受賞

学生限定の立体アートコンペ「AAC2011*」で、大学院修士課程美術専攻立体芸術の帆足枝里子さんの『土塊』が優秀賞を受賞しました。帆足さんの『土塊』はコンセプトが明確な上、説得力のあるプレゼンも高評価。受賞につながりました。帆足さんは「公共の場への設置を目的とした作品制作を体験できたのは、自分にとって良い刺激になりました。今後の制作にぜひ生かしたい」と話していました。

※ART MEETS ARCHITECTURE COMPETITION

NEWS
&
TOPICS



06 パーソナルなつぶやき、SPIRALに再登場

SICF12*でグランプリを受賞した富士朋子准教授のアートワークが表紙を飾るスパイラルの広報誌「SPIRAL PAPER」が発行されました。マンガの構法や手法を用いて、力強い描線と鮮やかな色で個人の小さなつぶやきを描き、目を奪う富士先生のアートワークが、「SPIRAL PAPER」の表紙と裏表紙に展開されています。
※Spiral Independent Creators Festival 12



05 歌舞伎町に新しいコミュニケーション装置を提案

新宿、歌舞伎町の資質を生かし、イメージを再構築することを目的とした新宿区によるプロジェクト「学生クリエイターズ・フェスタin新宿2011」に大学院修士課程デザイン専攻環境造形の学生チームが作品を出品、優秀賞を受賞しました。今大会テーマである「繋がりの誘発」を表現した受賞作『361』は、一般投票でも2位を獲得しました。



04 女子美と電通が考える人権ポスター

2007年より本学学生と株式会社電通のクリエイターとの共同制作プロジェクトとして開始した「女子美×電通 人権アートプロジェクト」。今年度前期は、杉並キャンパスにて伊勢克也教授が指導、後期は川口吾妻教授が引き継ぎ、31点のポスターを制作しました。完成したポスターは相模原キャンパス224ギャラリーで展示されました。



09 にこぶん、エココンで審査員特別賞受賞！

自分たちが取り組んでいる環境活動についてプレゼンテーションを行い、「計画性」や「実行力」といった様々な評価基準から評価を受ける全国大学生環境活動コンテスト(通称エココン)で、本学学生4グループで構成される環境活動団体「にこぶん」が審査員特別賞を受賞しました。昨年に続き、日頃の活動を報告する貴重な機会となりました。



08 日常の機能を非常時に生かすデザインが集結

学生と社会を結びつけることを目的とし、全国デザイン系大学学部3年生限定の選抜作品展「金の卵 オールスターデザインショーケース(主催:六本木AXIS)」に「日常/非常 ハイブリッド型デザインのすすめ」とのテーマのもと、芸術学部デザイン学科プロダクトデザインコースから木皿千智さん、黒川愛砂さん、村田芽さんの作品が選抜作品として展示されました。



07 スーパーレスキュー車に、はやぶさ舞い降りる

大学院博士後期課程美術専攻デザイン2年、チラク・ボンワットさんが制作したマークが、相模原市特別高度救助隊消防車「スーパーレスキューはやぶさ」のシンボルとして採用されました。小惑星探査機はやぶさにちなんで「はやぶさが高速で駆けつける様子をシンプルに表現したかった」と話すボンワットさん。マークつき消防車は今後10台まで増台します。

全国大学版画展

買上収蔵賞

- 岩淵彩香 芸術学部絵画学科洋画専攻版画コース4年
- 茶之木絵理 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域2年
- 小林文香 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域2年

京展

- 市長賞
- 茶之木絵理 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域2年

やまなし県民文化祭

- やまなし県民文化祭賞
- 小林文香 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域2年

神奈川県美術展

- <工芸部門>
- 入選
- 荒井明日葉 大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸(織)1年
- 井田未来 大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸(織)2年

清州国際工芸ビエンナーレ(韓国)

- 入選
- 荒井明日葉 大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸(織)1年

ジャパン・テキストスタイル・コンテスト

- <学生の部>
- 奨励賞
- 三村有見 芸術学部工芸学科織コース4年



杉並キャンパスの7号館新校舎が完成し、3月8日に竣工式が行われました。この7号館は、大講義室のほか芸術学部アート・デザイン表現学科のスペースとして建てられました。2010年度に教育組織が再編され、2年後に完成年度を迎えるアート・デザイン表現学科。新しい可能性をひめた表現の場として実技教室や工房、PCルームなどを設置。学生がより制作しやすい環境となるでしょう。

芸術学部

卒業制作賞

- 呉本舞子 絵画学科洋画専攻版画コース
- 藤森杏奈 絵画学科洋画専攻絵画Iコース
- 中川未央 絵画学科洋画専攻絵画Iコース
- 櫻井宗津美 絵画学科日本画専攻
- 及川翔子 工芸学科ガラスコース
- 江塚奈々 立体アート学科
- 尾藤みなみ デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 矢島玲奈 デザイン学科プロダクトデザインコース
- 山口結菜 デザイン学科環境デザインコース
- 中野 咲 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 加藤 蛍 メディアアート学科
- 土方理紗子 メディアアート学科
- 松本春日 メディアアート学科
- 伊藤由佳 ファッション造形学科

卒業研究賞

- 荒井美月 芸術学科

優秀作品賞

- 井上潤美 絵画学科洋画専攻絵画IIコース
- 岩淵彩香 絵画学科洋画専攻版画コース
- 平城佑里子 絵画学科洋画専攻版画コース
- 至井麻未 絵画学科洋画専攻絵画Iコース
- 竹内絵梨菜 絵画学科日本画専攻
- 山田里実 絵画学科日本画専攻
- 徳永 碧 工芸学科染コース
- 三村有見 立休アート学科
- 稲垣友紀 立休アート学科
- 橋本はな 立休アート学科
- 河本 永 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 鈴木 雅 デザイン学科環境デザインコース
- 仲子なつ美 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 中村理菜 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 福本有香子 デザイン学科プロダクトデザインコース
- 北條里実 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 森真奈美 デザイン学科プロダクトデザインコース
- 竹田今日子 メディアアート学科
- 山田佳奈 メディアアート学科
- 木村恵理 メディアアート学科
- 島崎吉美 メディアアート学科
- 大須賀百々香 ファッション造形学科
- 高木遥菜 ファッション造形学科

優秀研究賞

- 西穀治麻枝
- 梁 丞延

芸術学科

芸術学科

短期大学部

造形学科

卒業制作賞

- 檜垣友見子 美術コース
- 大池舞子 美術コース
- 和泉 月 デザインコース情報デザイン
- 海野百恵 デザインコース情報デザイン
- 堀川成美 デザインコース情報デザイン
- 坂本菜摘 デザインコース創造デザイン
- 松本来夢 デザインコース創造デザイン

優秀作品賞

- 谷英由美 美術コース
- 日野沙紀 美術コース
- 皆川 愛 美術コース
- 木佐實幸奈 デザインコース情報デザイン
- スクウエンディー デザインコース情報デザイン
- 野中美穂 デザインコース情報デザイン
- 板橋亜弥 デザインコース創造デザイン
- 小椋美咲 デザインコース創造デザイン
- 中澤亜美 デザインコース創造デザイン
- 松枝あかね デザインコース創造デザイン

短期大学部専攻科造形専攻

- 優秀作品賞
- 矢澤せきみ 美術コース
- 堀田 愛 美術コース
- 沢 陽子 工芸デザインコース
- 岩井 恵 工芸デザインコース
- 高橋さくら 工芸デザインコース

平成23年度加藤成之記念賞

芸術学部

- 室井麻未 絵画学科洋画専攻絵画Iコース
- 竹内唯可 絵画学科日本画専攻
- 万見あかね 工芸学科染コース
- 木下咲香 立休アート学科
- 磯村香那 デザイン学科プロダクトデザインコース
- 渡邊由紀 メディアアート学科
- 横井理子 ファッション造形学科
- 立原 舞 芸術学科

短期大学部

- 松本来夢 造形学科デザインコース創造デザイン
- 古谷昌子 専攻科造形専攻工芸デザインコース

平成23年度福澤一郎賞

- 清水香帆 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域
- 小林文香 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域

平成23年度大久保郷久子賞

- 高橋舞子 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域
- 米田恵理 大学院美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域
- 茶之木絵理 大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域
- 古田奈穂子 大学院美術研究科修士課程デザイン専攻ヒーリング造形研究領域
- 山本佳那 大学院美術研究科修士課程デザイン専攻ファッション造形研究領域
- 友岡あゆ子 大学院美術研究科修士課程芸術文化専攻美術史研究領域

平成23年度女子美術大学美術館収蔵作品賞

- 高橋舞子 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域

平成23年度女子美術大学美術館賞

- 高橋舞子 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域

芸術学部

- 中川未央 絵画学科洋画専攻絵画Iコース
- 櫻井宗津美 絵画学科日本画専攻
- 工芸学科染コース
- 立休アート学科
- 石井文香 デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
- 牧 恵子 メディアアート学科
- 渡邊由紀 ファッション造形学科
- 短期大学部 造形学科
- 日野沙紀 美術コース



input → output
溝田コレクション × 光島貴之

当館には、溝田コトエ名誉教授より寄贈された作品128点が「溝田コレクション」として収蔵されています。寄贈時に「学生に活用してもらいたい」との希望があったことから、本展では、「コレクションの作品45点を初公開するとともに、これを活用したJAMサポートスタッフ(美術館ボランティアの学生)による鑑賞・制作のプログラムを行い、紹介しました。

当館では、視覚にハンディのある方と一緒に作品を鑑賞するプログラムを、2009年から実施しています。この発展として、今回の展覧会では、視覚にハンディのある美術家・光島貴之氏とサポートスタッフとが、対話を通して作品を鑑賞する様子を映像で紹介、さらに鑑賞のイメージを元に、新たに制作した作品も展示しました。

関連イベントでは、打楽器奏者・片岡亮太氏と光島氏による即興演奏・制作「紡ぎ合いのリフレクション」に大きな反響がありました。片岡氏が生み出す音、制作の様子を伝える光島氏の言葉、二つを紡ぎ合いながら作品が生まれた瞬間は、感動的なものでした。

JAM 展覧会報告①

2011/12/9(金) ⇨ 2012/2/5(日)

平成23年度 女子美術大学大学院修了制作作品展

3/11(日) → 3/20(火・祝)

平成23年度大学院美術研究科修了生の作品が53点展示され、多様で豊かな表現が展示会場を埋め尽くしました。修了生のポートフォリオのコーナーや、一般公開イベント「キュレーターの眼・公開講評会」の開催など新たな試みがありました。

4/7(土) → 5/13(日)

国立台湾芸術大学・女子美術大学交流展

女子美術大学が学術交流協定を締結している国立台湾芸術大学との交流展です。本展覧会は本学版画研究室により企画され、両校の教員や学生約60名の版画作品を主に展示します。台湾から関係者が来日し、関連イベントに参加予定です。

5/21(月) → 6/17(日)

女子美染織コレクション Part2 沖縄の布—未来を紡ぐ—

女子美染織コレクションより琉球王国時代の伝統的な染織品を展示するとともに、琉球・沖縄と本学を繋ぎその思想を受け継いだ染織作家の作品、現在活躍している沖縄の未来を予感させる染織作家たちの作品をご紹介します。

7/11(水) → 7/30(月)

芸術学科4年生 展覧会

芸術学部芸術学科4年生「アート・プロデュース」の授業として行われる展覧会です。

銀座 gallery 女子美 展覧会報告

石塚雅子・東田理佐 展

平成24年1/9(月)→1/21(土)

短期大学部非常勤講師、石塚雅子と東田理佐による2人展。油彩、ドローイングを展示。

江口美幸 個展

平成24年1/23(月)→2/4(土)

洋画専攻卒業・春陽会会友、江口美幸による個展。油彩、ドローイングを展示。

第5回「新しい眼」 学生公募企画①

佐藤沙世子×松坂紀美代×森口美樹「s u k i m a」

平成24年2/6(月)→2/11(土)

学内公募で選ばれた美術学科洋画専攻3年生による3人展。

第6回「新しい眼」 学生公募企画②

古井彩夏×帆足枝里子

平成24年2/13(月)→2/18(土)

学内公募で選ばれた修士課程立体芸術領域1年生による2人展。

田口健太・吉田ゆう -Print on-

平成24年2/20(月)→3/3(土)

愛知県立芸術大学非常勤講師、田口健太と本学美術学科洋画専攻(版画)専任助手、吉田ゆうによる写真技法を用いた版画展。

第7回「新しい眼」 松尾玲央奈 展

—女子美術大学大学院博士後期課程修了作品展—
平成24年3/5(月)→3/10(土)

2012年3月に女子美術大学大学院博士課程立体芸術領域を修了する松尾玲央奈による個展。

飯嶋桃代 format-A

平成24年3/12(月)→3/24(土)

芸術学部(立体アート)非常勤講師、飯嶋桃代による個展。毛皮を用いた作品を発表

閉廊のお知らせ

「銀座gallery女子美」(GGJ)は2012年3月31日をもって閉廊することとなりました。2007年の開廊以来、多くの来場者が訪れ、本学の卒業、教員、学生の作品をたくさんの方々に紹介することができました。

おしらせ

「女子美ギャラリーニケ」がオープンします。

杉並キャンパス1号館1階に「女子美ギャラリーニケ」がオープンします。当展示場では「社会とつながる」をキーワードに展覧会をはじめ、ワークショップや講演会の開催など多様な活動を展開していく予定です。

4/6(金)→4/14(土)

「女子美術大学美術館賞受賞者作品展」

開場時間 10:00～17:00 / 休館日 日・祝日

「歴史資料展示室」が開室します。

自校史教育を始め、本学の歴史をたくさんの方々に伝えることを目的として杉並キャンパス1号館1階に歴史資料展示室を開室します。また、染織資料を中心として美術館の収蔵品を展示するコーナーを設け、収蔵品を公開していきます。

5/19(土)～10/28(日)

女子美術大学歴史資料展示室開室記念展

「収蔵資料にみる女子美の歴史」

開室時間 10:00～17:00 / 休室日 火・日・祝日、8/9～17

※ただし6/3、7/15・16、9/16、10/28は特別開館



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報課
監修 山本吉男・林規章
企画・デザイン 株式会社 Kitchen Sink.
制作・印刷 株式会社 日相印刷
発行日 2012年4月4日

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報課までご連絡ください。

TEL 042-778-6123
広報課 E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <http://www.joshi.ac.jp>

